

咳喘息(せきぜんそく)とは

—はじめに—

咳が長引くという経験をされた方は多いのではないのでしょうか。風邪の咳が続くこともありますが、咳が3週間以上続く場合も他の病気のこともあります。長引く咳の最も多い原因は「咳喘息」です。空咳が症状となる気管支喘息の一種です。喘息、というと特殊な病気のように聞こえるかもしれませんが、喘息の特徴となる気道過敏性(気管支が刺激に敏感な状態)は症状が全くななくても約20%の人にみられるものです。気道過敏性は気管支の炎症から生まれますが根本的な原因はまだはっきりしていません。この「気管支が敏感な状態」をもっている人が、感染(風邪など)やアレルギー(花粉やハウスダストなど)やストレス(身体的、心理的)などをきっかけとして咳の発作が起きることを咳喘息といいます。喫煙は咳を増幅させるので、喫煙される方は禁煙が必須です。

—診療—

診断は総合的に行います。咳は、就寝前や早朝に多く、気温差や会話や運動で起こりやすくなるのが特徴です。レントゲン検査、血液検査、肺機能検査、呼気一酸化

窒素測定などを行います。気道過敏性はヒスタミン吸入検査で測定できますが煩雑であるため治療薬の効果をみて判断することもあります。

治療は軽症の気管支喘息と同じで、気管支の炎症を抑えるための吸入ステロイド薬や気管支を拡張する吸入気管支拡張薬という「吸い込む薬」が中心になります。1週間程度で咳は減りますが、咳が完全に治っても気管支の炎症は残っているのでここで治療をやめてしまうとまた咳がでてきます。症状によりませんが、3〜6ヵ月毎に薬の数量を減らしていくことが一般的です。最も少ない薬の量でも症状がなければ治療終了を試みますので、3ヵ月以上は吸入薬を続けることになります。それでも吸入薬終了後に咳がぶり返してしまう場合はより長期間の治療が必要です。

気管支の炎症を残したままだと、咳喘息からより症状の強い気管支喘息になります。しかし残念ながら気管支の炎症を調べた検査は確立されていません。いつまで治療を続けるべきか、薬をやめても大丈夫かは予測ができませんので、治療を進めながら咳の様子で判断します。

—治療—

治療に用いる吸入薬の安全性は高いので、診断前の使用や長期治療も安心です。のどの副作用(違和感、かすれ声)も薬を替えることで落ち着くことが多いので、ご自身に合った使いやすい吸入薬を選んでいくことが大切です。ただ安全な吸入薬といえども長い年数で生じる重大な副作用もありますので、数ヵ月毎には治療が症状と合っているのかを確認しながら治療を続けなければなりません。

咳が続く時はまずお近くの医療機関を受診して下さい。診断や治療の難しい場合は市民病院で対応します。

